

日本古代の墓の謎に迫る！

～なぜ竪穴式石室から

横穴式石室に！？～



群馬県立中央中等教育学校 1年4組

小野栞歩

返却希望

1.はじめに

(1) 動機

小学5年生のとき、地元の近くにある大室公園のクイズラリーに参加し古墳の存在は知っていました。まだその頃は幼く、古墳がなんのために誰のために造られたのかは知りませんでした。そのクイズラリーで、「竪穴式石室と横穴式石室の特徴の違いはなんだろう」というクイズに目がとまり、同じ古墳でもその造りに違いがあることを知りました。それがずっと心のなかにあり、その謎を解き明かすためにもう一度大室公園の古墳を訪れました。クイズで疑問に思ったことを明確にしたいと考えたからです。事前学習をして行ったので、現地を訪れると昔の風景や匂い、人々の顔や様子が想像できて胸がドキドキし、とても楽しかったです。

石室の作りの歴史などについて疑問に思うことがあったので、調査してみたいと思いました。

(2) 調査・研究方法

- ・大室古墳群を実際に見に行き行って現地調査を進める。
- ・実際に石室の近くに行ってみて石の大きさなど現地調査をし、古墳のできた時代のことを想像してみる。
- ・疑問についての仮説を立てる。
- ・私の仮説に対する答えを本やインターネットで探す。
- ・まとめる。

2.まず 古墳とはなにか？

「古墳」の考古学的定義は研究者により異なり、明確に一つに決められるものではない。「墳」の字は「墳丘」を表し、盛り土をした塚を持つ墓のことを指す。それが古代のものであるから「古墳」で、同様の形状のものでも時代が違えば古墳と呼ばれない。また、その内部に棺を持ち、一般人ではないある程度の権力者を葬るためのものであることも、ひとつの古墳の条件である。

つまり、古墳とは、「いわゆる古墳時代、3世紀半ばから7世紀にかけて造られた、墳丘を有する権力者の墓である」と理解すれば良い。

大仙陵古墳（仁徳天皇陵）に代表されるように、巨大な古墳は関西圏を中心として全国に見ることができる。古墳の規模は、すなわち被葬者の政治的・経済的権力の大きさを示すものだ。その造営には、広大な土地と、時間も費用もかかる工程に割けるだけの労働力、財力が欠かせないからである。古墳は、葬られている者がどれほどの影響力を持つ人物であったかを示す指標となる。3～4世紀が古墳時代のピークとされるが、長い間、古墳は権力の象徴として造られ続けたことは間違いない。

3. 現地調査をした大室古墳群

前橋市西大室町、東大室町にある古墳群。全体では10基以上の古墳が点在する。主要な前方後円墳として、南から前二子古墳（全長94m、東日本で最古級の横穴式石室を持つ）、中二子古墳（全長111m、盾持人物埴輪が多数）、後二子古墳（全長85m、石室前から多量の土器）、小二子古墳（全長38m、人・馬・家・太刀などの埴輪が多数）の4基が並び、6世紀前半～後半（古墳時代後期）にかけて、この順で築かれた。

赤城山南麓一帯には、これほどの大型古墳群はほかにはなく、まして6世紀前半といえは榛名山が2度の大噴火を起こし、県内全域が大きな被害を被った時期である。大室古墳群に埋葬されたのは、荒砥川や粕川の水利を掌握し、流域を広く支配した一族と考えられる。崇神天皇の皇子である豊城入彦命の墓とする伝承があり、古くから地域の人々によって大切にされてきたため、保存状態も良い。

（1）前二子古墳

墳丘の長さ93.7m、後円部の高さ13.6m、周堀と外周溝を含めると148mにもなる、大室古墳群で最初に造られた大前方後円墳だ。この古墳は、明治時代に発掘された。

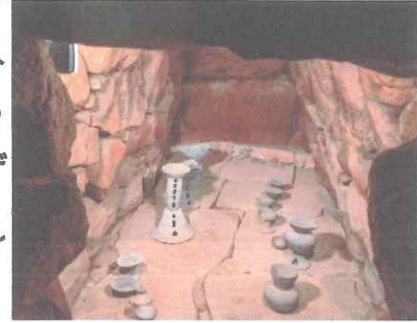
～細くて長い石室が特徴～

石室は小ぶりの石で積まれ、玄室と羨道が長いのが特徴だ。床には、加工された凝灰岩の平石が敷かれ、石室にはベンガラで赤く塗られている。玄室には、扉石を立て閉じられていた。これらのことから、関東地方に横穴式石室が取り入れられた最初の頃のものであることがわかる。

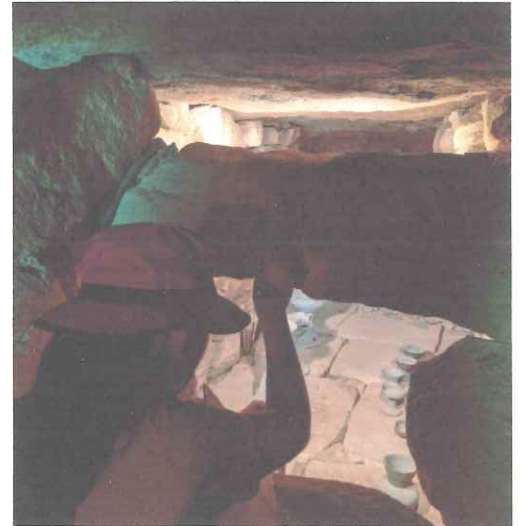
前二子古墳



・この写真は前二子古墳の石室の写真だ。入口付近の高さや横幅などをメジャーで測ると縦長に見えるが、高さ120cm 横幅120cmほどで、正方形の形の入り口だった。奥の方の高さや横幅をメジャーで測ると高さ180cm 横幅120cmほどだった。父が膝を曲げながらでしか入れなかったことから、古墳が作られた時代には、父のような身長つまり、180cm以上身長の人がいなかったことが考えられる。現代の人々の平均身長と古墳時代の人々の平均身長を比べてみたら面白そうだ。



た時代には、父のような身長つまり、180cm以上身長の人がいなかったことが考えられる。現代の人々の平均身長と古墳時代の人々の平均身長を比べてみたら面白そうだ。



(2) 中二子古墳

墳丘の長さは111mで、二重の堀を含めると170mにもなる。この大きさや内容から赤城南麓地域を支配していた大豪族の勢力が最も栄えた頃の首長の墓と考えられる。三古墳の中でも別格扱いの歴史があり、戦前は「陵墓」（天皇家ゆかりの古墳）の候補にも挙げられた。埋葬施設は未調査だが、横穴式石室と考えられている。

~埴輪~ 墳丘の上下の平坦面や中堤には、いろいろな形象埴輪やたくさんの円筒埴輪が並べられていた。埴輪は当時一級品の藤岡産が使われていた。（埴輪に産地があることを初めて知った！これも詳しく調べてみたい。）

~中堤の復元~ 円筒埴輪の間に盾持人と朝顔形埴輪が規則的に配置されている事がわかった。これをもとに埴輪列を復元した。

中二子古墳



・中二子古墳には石室が見当たらなかった。それはまだ未調査だという。横穴式石室だとされているが、もしかしたら竪穴式石室だったりして！？中二子古墳はすごく大きく一回りするのに時間がかかった。道なき道を足の痒さに耐えながら進んでいくと、埴輪がたくさん並んでいた。何度も回って調査をしたが、やはり石室の入り口らしきものは見当たらなかった。今度ぜひ、調査を進めて解明してほしい。この巨大な古墳に二重の堀を造るのはとてつもない時間と人手が必要だったのではないかと考えた。しかしそんなことは知らない一年生の弟が埴輪のすぐ横で走り回っていて堀の中に落ちてしまうのではないかとずっとヒヤヒヤしていた。

調べていたとおり埴輪が規則的に置かれてあった。

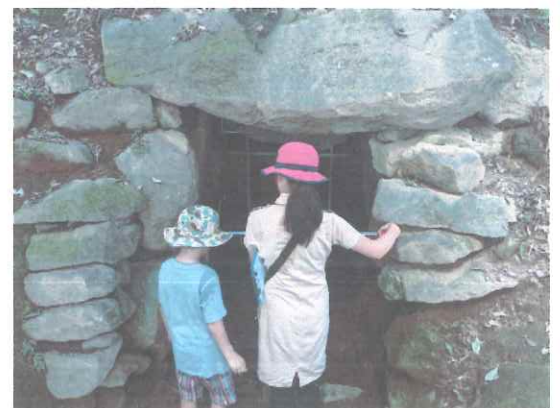


(3) 後二子古墳

大室古墳群の「三代目」、6世紀後半に築かれた全長85mの前方後円墳。墳丘規模は小さいものの、巨石を使った横穴式石室が注目される。前二子古墳の石室に比べてゆったりとした構造で、合計6人以上が埋葬された。元々の地形をうまく利用し、石室の石材も近くで確保するなど、築造時の「省エネ化」が図られている。前二子古墳と同じように、明治時代に発掘された古墳である。

~石室の特徴~

死者を葬る玄室を広くした両袖型石室で、大きい石を使っているところに特徴がある。玄室は間仕切石で二つに分けられ、奥には遺骸とともに装身具・太刀など、手前には武具・馬具・須恵器などが置かれた。この石室は墳丘の基壇面を掘り下げて造られ、入り口までは基壇面を掘りくぼめた墓道がついている。

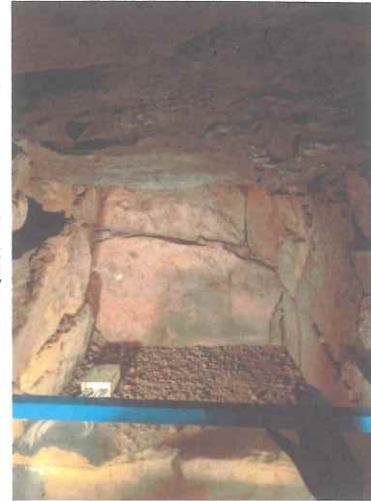


後二子古墳



・後二子古墳は前二子古墳よりも大きな石が並んでいた。6世紀前半～後半にかけて、石の加工技術や重たいものを運ぶ手段が進歩したのではないかと思う。石室の奥の高さは約200cmで父は なんとか普通に立つことができていた。入口付近の高さは、160cmで、幅は100cmだった。前二子古墳は入り口の形がほぼ正方形だが、後二子古墳は縦長の長方形の形だった。大きな石を上にとたくさん積み上げてい

るから、縦長になったのだろうか。まさか古墳人の平均身長が伸びたのだろうか。また、前二子古墳は羨道が長かったが、後二子古墳はあまり羨道が長くなかった。石室の下を掘り下げて、墳丘の土が節約されていて時間と人手を最小限にした省エネタイプ。

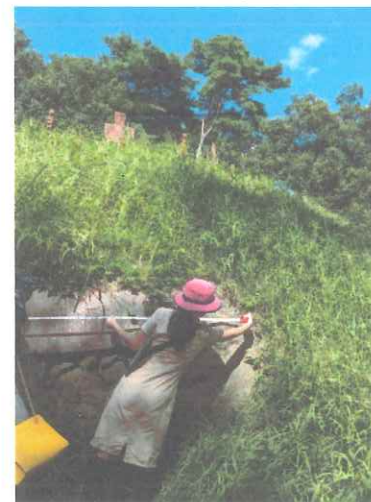


(4) 小二子古墳

全長38mと小ぶりなサイズの前方後円墳。後二子古墳と西野山との間に向きを揃えてはめ込むように造られている。後二子古墳と並んだ位置に、ほぼ同時期に造られているので、後二子古墳と関わりの深い人物の墓だと考えられている。横穴式石室は盗掘されていたが、墳丘の調査によって埴輪の配置状況が判明し、現在では埴輪のレプリカが復元整備されている。後円部には器財埴輪、前方部には人物・馬形埴輪が並べられている。

小二子古墳

・石室のようなところは閉ざされていて中は見ることはできなかった。閉ざされていたところの高さは180cmで横幅は210cmだった。上の方には埴輪が並べてあった。やはり他の古墳と違って、とても小さかった。



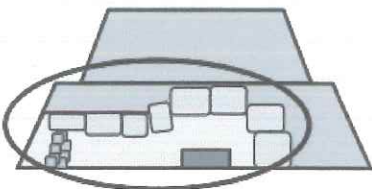
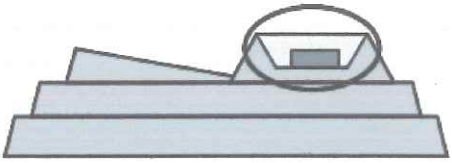
疑問1：横穴式石室が取り入れられたのはなぜ？

横穴式石室が取り入れられるまでは、遺体の埋葬施設は竪穴式石室が主流であった。群馬県では6世紀の前半、ちょうど前二子古墳が造られた頃から、遺体の埋葬施設が横穴式に変わる。それはなぜなのだろうか。

仮説1：埋葬すべき人数が増えてしまったため。

時代は弥生時代を経て、集団で行う稲作が盛んになったことで集落ができ、その集落を従える有力者や権力者が現れたと思われる。この土地は荒砥川と粕川など幾筋もの川が流れ込み、非常に豊かな土壌と水に恵まれていたため、稲作技術が伝播してきて以来、水田の大開拓が進められたと思われる。また、三方を山に囲まれ山麓や台地部では木の実や果物が豊富に採れたと考えられる。こうした豊かな自然の恩恵を受け、集落は栄え人も増えたに違いないと思う。そうなると、権力者の身内の数も増え、埋葬すべき人数が増えたため、1つの石室に何人も埋葬できる横穴式石室が取り入れられたのではないかと考える。

横穴式石室と竪穴式石室の違い

	横穴式石室	竪穴式石室
時期	古墳時代後期～終末期	古墳時代初期～中期
埋葬人数	1人～十数人	1人
特徴	墳丘には中に入る道(羨道)があり、その奥に遺体を納める空間(玄室)が広がっている。かなり広い。追葬できる。時代的に埴輪等の副葬品が発掘されることが多い。	墳丘の頂点から真下に竪穴を掘り、石室をつくり遺体を納める。蓋石をのせた上に土をかぶせるので二度と蓋を開けることができない。単独葬。
図		
尾崎研の発掘例と年	壇塚古墳（前橋,S25）、高塚古墳（榛東,S34,35） 八幡観音塚古墳（高崎S24,35）←東日本最大の石室	鶴山古墳（太田,S23） 蔵手塚古墳（伊勢崎,S27）

竪穴式石室は、棺を納めたあと、大きな石で石室の上の部分の部分を塞ぎ、その上に埴輪などを飾った。このため、一度塞げば二度と開けられず、基本的に一人のために造られていた。

横穴式石室は、棺を埋めたあとでも、入り口を塞いだ石や土を取り除けば、何度でも出入りすることができるので、時代を経て長く使われることが多く、親子だけでなく孫も同じお墓に入ることがあったそうだ。特に、血の繋がった人達と一緒に埋められることが多かった。出土した骨の研究から、お嫁さんは実家のお墓に埋められたことがわかっていて、当時の夫婦は死後別れ別れだったのではないかとされている。

横穴式石室の埋葬施設は中国の後漢の時代に成立した。日本に入ってきたのは、4世紀の終わり頃から5世紀のはじめにかけてだが、すぐにはあまり広まらなかった。6世紀頃に大和政権の膝下である近畿地方で大型前方後円墳に採用されたことをきっかけに、全国に広がり完全に横穴式石室に変わった。

横穴式石室になった当初は一つの石室に一体で埋葬していた。しかし、他の石室に追葬する際それ以前に埋葬された人の状態を目の当たりにし、蘇生の希望が絶たれたことで、同時期に伝来した仏教の霊肉分離の思想を受容するようになった。その結果、以前と比べて埋葬することに対する価値観が変化し、少し雑になったのだと、群馬県の古墳調査に貢献された尾崎先生が述べている。

結果1：まさかの、埋葬方法が雑になった！

埋葬方法が雑になったという見解には驚いた。しかし、自然の恩恵を受け食べ物も豊富にあった豊かなこの土地では、生活が安定し子孫が繁栄したに違いないから、埋葬する人数が増えたという私の見解もあながち間違いではないのではないかと考える。

ここで新たな疑問が生まれた。追葬する際に、それ以前に埋葬された人を目の当たりにし蘇生の希望が絶たれたと記されている。つまりその当時の人々は死んだ人間も生き返ると考えていたのか。こんなことは古代エジプトのミイラだけの話かと思っていた。

疑問2：当時の人は死んだ人間が生き返ると信じていたのか！？

後二子古墳の石版に、墓前のまつりという話が記載されていた。そこにはこう書いてあった。「奥に見えるのは、石室の入口前で行われた儀式に使われた土器の一群です。土器の特徴からこうした儀式が何回も行われたと考えられます。葬られる死者と、最後の飲食をともにする儀式が行われたのでしょうか。」



仮説2：当時の人々は本当に死んだ人間が 生き返ると信じていたのではないか！

前二子古墳の説明にはこんなふうに書かれていた。「～黄泉の国へタイムトラベル～狭くて長い石室は、まるで黄泉の国への入り口です。石室からは、土器・装身具・鏡・金メッキされた馬の飾り 金具などの副葬品が出土しました。」これを読んだときに、黄泉の国という言葉から、古代エジプトを連想し、蘇るという意味なのかなと思った。石室に、貴重な副葬品と一緒に埋葬したり、土器を並べて儀式を何回か行ったということは、神の存在を信じ 神に捧げ物をする事で、死んだ人間が本当に生き返ると信じていたのではないかと考える。（仏教の伝来で霊肉分離の思想を受容する以前の古代の人々が信じていた神の存在を詳しく調べるのも面白そうだ！）

黄泉の国とは

死者の住むとされる地下の国。〈ヨモツクニ〉とも呼ぶ。〈ヨミ〉は〈ヤミ(闇)〉や〈ヤマ(山)〉と類義の語。また〈黄泉〉は漢語で〈黄〉は土の色を表し〈地下にある泉〉の意で死者の国をいう。

自分が思っていた黄泉の国とは、死者が蘇るようなことかと思っていたが、実際には死者の国を指していた。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

の資料によると、死から埋葬までの間にいくつかの儀式を行うという丁寧な葬送意識が古墳時代人に存在したことも理解しておかねばならない。現代でも医者が死と認定してから生き返る人がいる。ましてや古代においては、死んだように見えても、生き返ることが多かったのかもしれない。古代人は、死と思える現象が起きた時に死者の蘇生を願う「魂振り（魂呼び）」儀式を行い、その後、その願望が叶わぬと知るや死者が安らかに眠れるよう祈る「魂鎮め」の儀式に移ったらしい。

結果2：当時の人々は死んだ人間が生き返ると本当に信じていた！

現代は科学も医療も進歩し、人間の死を科学的に判断 確認をすることができるが、古代はそれを正確に判断確認する材料がなかった。上の記述にもある通り、死んだように見えても、生き返ることが多かったのかもしれないと書いてある。つまり、死と思える現象が起きた時に死者の蘇生を願う儀式で本当に蘇った人もいるのかもしれない。蘇生が叶わないと分かれると死者が安らかに眠れるように祈る儀式に移るとあるが、完成までに時間のかかる古墳を造る途中でも、もしかしたらまだ蘇るのではないかと望みを捨てていなかったのではないかと考えられる。

人はこの世に生まれ いつかは誰しも平等に死が訪れる。これは現代では常識であるが、古代では人の死を受け入れること自体が難しかったのではないかと考える。それを裏付けるのが、殯の存在である。殯とは、死後すぐに葬儀や埋葬を行わずに、遺体を長期間仮安置する日本古来の葬制だ。すぐに葬儀や埋葬を行わないのは、故人の復活を願いつつも、遺体が腐敗し白骨化していく様子を見守ることで緩やかに死を受け入れていくことや、死者の崇りをおそれ霊魂を慰めることが目的だったと言われている。かつては位の高い貴族や皇族が亡くなると、殯が行われていたようだ。位の高い貴族や皇族が急に亡くなった場合、あとを継ぐ人がすぐ決まるわけではなかったと思う。国の混乱を防ぐためにも殯を行い、後継者を決めたりする時間を稼いだのではと考える。

また、古墳の向きや石室の入り口などに、なにか意味があるのではないかと考えられる。なぜなら、大室古墳群の古墳の向きはすべて東を向いていて、石室の入り口はすべて南にあったからだ。これらの配置は死んだ人間を蘇らせる儀式などとなにか関係があるのではないかと思った。これはまた壮大な研究になりそうなので、来年以降調査したいと思う。

4. 考察

巨大古墳が急に築かれるわけではなく、弥生時代にはすでに古墳のような墓が築き上げられていた。時代の経過とともに社会が変容し、それに合わせて古墳を取り巻く環境も変わっていった。その変化に合わせて、形を変え、石室の作りも変化していったのだと今回分かった。更に時代を経て今現在の見慣れたお墓の形がある。古墳はまさに私達のルーツである。貴重な遺跡が私達の身近にある幸運に感謝し、もっともっと研究を進めていきたい。

5. 終わりに～まとめと感想～

古墳に限らず、遺跡を探訪するのに最も適した時代は晩秋から初春にかけてとされる。この時期には、草が枯れて地形の微妙な変化がわかりやすくなると同時に、蜂や蛇といった危険な生物の活動が鈍くなるというメリットがあるからだ。この夏の課題ということで、真夏の炎天下に出かけて、生い茂る草をかき分けなんとか調査を行った。また、古墳を訪問する際には、林野に分け入ると同等の準備が必要であるらしい。服装としては長袖長ズボン。虫さされを防ぐだけでなく、ウルシ・ハゼなどでかぶれる可能性を軽減し、トゲのある植物から皮膚を守ることができる。そんな事も知らずに、ワンピースという軽装で現地に向かい、ひどい目にあった。蚊には刺されるし、植物で足はかぶれるし、熱中症になりそうになった。前日、4回目のコロナワクチンを接種し、38度の熱の母にも同行してもらい申し訳ない気持ちになった。しかし、これも夏のいい思い出となった。だがしかし、次に探訪するのは晩秋から初春にしたいと思う。

小学5年生の時に参加したクイズラリーで興味を持ったことから調べ始めたが、古代の人々の考えや行動 様子などが想像でき、まるで古代へ旅をしてきたような気分になった。私が一番興味を持ったのは、その時代を生きた人の死生観だ。現代では死んだ人間はもうもとは戻らないのが常識だが、古代では死んだ人間が蘇ると信じられていた。その時代には科学は存在していなくて、まじないや、占いで世を動かしていた。今とは全く違った視点で見ることで、また新たな発見があるのではないかと思った。ともあれ、亡くなった人間を慈しみ丁寧に大切に弔うのは今も昔も変わらない。殯は、死者の復活と魂の鎮魂を願い一定期間儀式を執り行うことで、死者に心置きなく旅立ってもらい、自分たちも現世の暮らしに戻る。その意味では、現代の喪が明けることに共通しているのでは？お盆で家族と墓参りをしながらそんなことを考えていた。

次回の研究では今回解き明かせなかった、古墳の向きや石室の入り口の位置についてなにか規則性や意味があるのかを調査したい。今回は第7波で叶わなかったが、落ち着いたら資料館にも足を運び、専門家の先生の話伺えたらと思う。知れば知るほど奥深い東国文化！全国的にも珍しい遺跡が数多く点在する群馬のこの地は宝の山である。私の旅は始まったばかりだ！

参考文献 ・ <https://www.rekihaku.ac.jp/>

- ・ 東国文化副読本 2020年 4月発行
- ・ 古代史散策ガイド 巨大古墳の歩き方 2019年 7月発行
- ・ 群馬古墳探訪 2017年 3月発行
- ・ 群馬の遺跡4 古墳時代1 平成16年 11月発行
- ・ 上野国の古墳と文化 1977年 発行
- ・ 東国文化ガイドブック 2014年 発行